

憲法という経典

日本国憲法は3日、施行から68年を迎えた。新聞各紙の特集に目を通したが、表題と写真の朝日新聞5月2日に掲載された作家・島田雅彦さんの「寄稿文」が心に響いた。とりわけ印象に残ったことばを抜き出していききたい。

日本が自国のことのみならず、他国の戦後復興、人道支援にも貢献し、「世界の赤十字」たらんとしてきたことで獲得できた世界的信用は大きな財産である。外国人が日本人に対して抱く好印象もまた、平和主義を貫いてきたことに由来するだろう。「優しい日本人」のイメージはおそらく、現行憲法によってもたらされたに違いない。

それを「平和ぼけ」と自嘲する人は改憲してでも「世界の警察」の片棒を担ぎたくてしょうがないようだが、そうすれば戦後日本が積み上げてきた信用は全て失われる。彼らはその損失を計算したことがあるだろうか？

改憲のハードルは高いが、ほぼ一党独裁体制の下、迷走する野党からの賛成票を上乗せし、改憲発議要件の緩和に成功すれば、改憲は一気に進む可能性もある。反中ナショナリズムを焚き付けられ、大政翼賛ムードに導かれた世論もそれを容認してしまうかもしれない。そんな中で、いま一度、国民は自問すべきではないか？現行憲法に忠実に政治を行うことがそれほどナンセンスなのか？日本が直面している現状と現行憲法は、耐えがたいほどにかけ離れているのか？

確かに憲法と歴代政権の政治決定に齟齬(そご)はあるが、国民はその時々の政治情勢とは別に、憲法を平和の誓いとして受け継いできた。聖書がキリスト教世界の共通の倫理である博愛、寛容、自由の拠りどころであるように、憲法も日本人の倫理の経典であり続けた。

戦争は原爆にも似て、莫大な負の遺産を後世に残す。好戦的な政治家たちは戦争責任など取る気はさらさらなく、自分たちを支持した国民が悪いと開き直るだろう。彼らが自殺行為に走るのを止めなければ、私たちだって自殺幫助の罪をかぶることになるのだ。現行憲法は単にユートピア的理想を謳ったものでも、時代の要請に応えられなくなった過去の遺物でもなく、日本が歩むべき未来に即した極めて現実的な指針たり得ている。

(2015年5月5日)

